

中学校社会科における学習意欲向上のための指導

—社会経済的要因から学習意欲の格差が生じている時代背景をふまえて—

教育実践開発コース 17GP505 氏名 竹谷 涼

1 はじめに

近年、日本国内では貧困への関心が高まり、特に「子どもの貧困」は重要な政策課題となっている。社会階層の高い家庭に育つ子どもよりも低い家庭に育つ子どもの方が多くの場面で不利になる可能性が高いとする湯浅ら（2009）の研究や、親の職業と学力の相関関係を指摘する阿部（2008）の研究などからは、同じように公立中学校に通い教育を受けているにもかかわらず、格差は存在し、社会階層が低い子どもの方が学校で不利になりやすいことが分かる。さらに、荻谷（2001）は、階層が低いほど授業をきっかけに詳しいことを知りたいと思う生徒が減少するという、学習意欲の格差を指摘する。学習指導要領が「関心・意欲・態度」を重視しているように、学習意欲は、学力を支える基盤である。結果としての学力だけでなく、その前提となる学習意欲の段階で、大きな格差が存在していることは、現代の日本の深刻な状況を示している。

義務教育である小中学校が、こうした格差をそのままにすることは、教育の平等の観点からも、決してあってはならないことだろう。先の法律に基づいて政府が策定した「子供の貧困対策大綱」（2014）においても、子どもの貧困対策の第一の柱として「教育の支援」が位置付けられ、「学校をプラットフォームとした総合的な支援」「きめ細かな学習指導による学力の保障」が示されている。

では、どうすれば厳しい社会経済的背景のある子どもの学習意欲を高めることができるのだろうか。社会科の教員を目指す者として、この課題に対し、授業実践を通して研究したいと考え、「中学校社会科における学習意欲向上のための指導」をテーマとした。

2 研究の取組

（1）先行研究をふまえた学習意欲を引き出す社会科指導に関する検討

どのようにすれば、社会科において学習意欲に欠けがちな生徒の学習意欲を向上させることができるのか。先行研究をふまえ、自らが行う実践上の工夫について考えた。

①「自分ごと」として学ぶ社会科

南浦・柴田（2013）は、学習意欲に関連して「社会科学習観」の変容に注目している。社会科学習観とは、「学習／教授についての目的、意味、内容、方法やその効果などに関して、授業の受け手側が自覚的／無自覚的に持つ信念や信条、確信」のことである。南浦・柴田（2013）は、現在生徒たちの中にある社会科学習観は、知識を暗記するといった形式のものが多く、教師の関わりによってそれを変容させ、学習内容を自分に関わることとして捉えさせることで学習する意味を見いだすことができるとしている。具体的には、新聞記事などを扱い、社会問題を生徒一人ひとりに考えさせる活動を行う中で、

明示的言葉がけで、教員側が考える社会科を学ぶ意義を伝えるとともに、生徒の発表や生徒同士の議論の中で、「なぜ」と問いかけることにより、社会科を学ぶ意味に気づきを促していた。

この南浦・柴田（2013）の実践研究を参考に、私も生徒が社会的事象を自分に関わることとして捉え、考えることができるような工夫によって、生徒の学習意欲を高めたいと考えた。生徒が、どの単元においても「なぜ学ぶのか」、「自分にどう関わっているのか」を考え続けることで、「社会科の内容を学ぶこと」が暗記作業ではなく「自分自身に関わる内容を学ぶこと」であると気付くことが、社会科を意欲的に学ぶことにつながると考えるからである。つまり、授業で扱う内容が「自分ごと」につながるかどうか学習意欲を喚起する上で鍵となるのではないかと考えた。そこで、単元や一時間を通して、社会科を学ぶ意味に気づけるよう授業形態の工夫を行った。例えば、「なぜこの題材を学ぶ必要があるのか」や「自分はどちらの立場に立つのか」等を考えさせるように、言葉がけや発問の仕方の工夫を行った。「なぜ学ぶのか」を考えるための前提としての基礎知識については、丁寧且つ的確に伝えるよう心掛けた。

②「自分ごと」として捉えるためのデジタルコンテンツと協同学習

生徒が、社会科の内容をより自分に関わることとして捉えることができるように、指導方法の面で塚本（2008）の「デジタルコンテンツの活用」と井上（2014）の「協同学習」を参考にした。

小学 5, 6 年生を対象に確かな学力を向上させるための社会科の授業づくりを研究した塚本（2008）は、子どもにとって身近な地域素材を教材化することや「デジタルコンテンツの活用」が、学習意欲を喚起すると述べている。彼の実践は、地場産業を取り上げ、事前学習や体験活動を通して人々の工夫や努力に目を向けさせ「なぜ」を主体的に追究する中で、デジタルコンテンツを有効に活用していた。具体的には、昔と今を比較した写真資料や人々の工夫や努力に気づかせるための補足資料等の提示、子どもの意見を画面に映し出し共有する場面等で活用され、子どもが主体的に授業へ取り組むための補助的な役割を担っていた。この塚本（2008）を参考にデジタルコンテンツを活用し、生徒の感情に訴えかける映像資料の提示、デジタルコンテンツと連動させたワークシート等の活用を通して、学ぶ意味に気づかせ考えられるようにした。

また、中学社会科の公民的分野で学習意欲と思考力を高める授業を目指した井上（2014）は、生徒の実態に合わせて「協同学習」を組み込むことで、一人ひとりが欠かせない存在であることを実感して自己存在感と自己有用感が高まり、学習意欲と多面的、多角的な思考力が向上するとしている。この井上（2014）を参考に、ペア・グループ活動を取り入れた。生徒一人ひとりが、「自分だったら」という視点で考える場面を協同学習の前に設定し、その後話し合わせることで「自分とは異なる他者の意見に触れながら自分の考えを深めたい」と思えるようにした。また、テーマを生徒自身の生活と結びつけて設定することで、意見の共有が図れるよう工夫した。そうすることで、「自分ごと」としてより深い話し合い活動を行うことができると考えた。加えて、自分の意見に自信が無い場合でも他者の意見を取り入れながら授業に取り組めるようにした。

本研究では、「なぜ学ぶのか」を大切にしながら「自分ごと」として考えを深められる工夫を追究することで、学習意欲の向上を図っていく。

(2) 実習校 A 校における観察と主な対象

実習校 A 校では、2017 年 5 月～2018 年 12 月まで、基本的に週一度の実習日に観察を行い、フィールドノートに記録した。当初配属された 2 年 B 組はクラス変え無しに進級して 3 年 B 組となり、継続して観察および授業実践をさせていただいた。

① 学年の様子

担当の 3 年 B 組を含む学年は複数のクラスで構成されている。B 組担任を中心とする学年の教員へのインタビューや、職員室での教員同士の会話をもとに、生徒の社会経済的背景について把握した。この学年には、「配慮を必要とする生徒」が全体の約 18% 在籍している。そこには、家庭環境に困難を抱えている生徒、いじめを受けている生徒（過去に受けたものも含む）、発達障害を抱えている生徒などが含まれる。

② 担当クラス B 組の様子

B 組には 37 名の生徒が在籍しており、そのうち準要保護家庭に該当する生徒が 5 名、母子家庭である生徒が 8 名在籍している（重複あり）。フィールド実習の中で、B 組の生徒とは休み時間や行事など多くの時間で関わったが、学校生活の様子からは社会経済的背景に困難を抱えているか否かは判断しづらく、外見での差異は感じられなかった。学校側から、個々の生徒の社会経済的背景に関わる詳細な情報は得られないので、学習意欲の関係を明確に示すことはできないが、休み時間に B 組の生徒の困り感に対する相談を受ける中で、困難な社会経済的背景を持つ生徒がいることは感じられた。

授業研究を行うにあたり、学習意欲が低い生徒として観察対象としたのは、B 組における観察（表 1）と、B 組担任からの聞き取りで一致した 7 人（N～T）である。B 組担任によれば、2 学年の段階でこの 7 人は、ほかの生徒に比べ基礎的な知識が十分に身につけておらず、3 学年に進級して以降も学習意欲の面で課題を抱える状態が継続している。

(3) 授業実践における工夫

昨年度から、計 4 期の授業実習を行った。1 月の 1 年次後期フィールド実習を I 期、5 月の 2 年次前期フィールド実習を II 期、8 月から 9 月にかけて行われた 2 年次集中実

〈表 1 B 組に在籍する生徒の学習意欲の状況〉

	生徒の学習意欲に関連して観察されること
N	授業中に寝ることが多く、ワークシートやノートを記述しない、周りに比べて 作業の遅れ が目立つなどがある。複数の資料を関連させて読み取ることや、文字だけの資料を読み取ることなどが苦手な傾向にある。自分自身が興味がある題材を扱う際には積極的に反応する。
O	授業の内容とは 関係の無い話 や後ろを向く等の行動が目立ち、周りの生徒を巻き込もうとする様子が見られる。全体の場で積極的に発言する様子も見られるが、周りの生徒の意見をそのまま書き写す等の行動も見られる。
P	授業中に寝ていることが多く、教員の指示を聞き逃すことが多い。自分の意見を書くことが少ないため、 グループ活動や発表の際には参加していない ことが多い。写真資料などには興味を示す。
Q	授業中に寝ることがあり、グループ活動や発表の際に 積極的に発言することは少ない 。また、授業者の説明が長引くと集中力が切れ、指示を聞き逃すことなどが度々ある。
R	自分の 意見を書くことが少なく 、活動への参加が活発ではない。班活動などの際に、授業とは関係の無い話題で盛り上がることもある。
S	自分の意見を書くことが少なく、 自分の考えに自信がないため発表する機会も少ない 。また、授業とは関係の無い話題で周りを巻き込もうとする行動も見られる。
T	自分の 意見を書くことが少なく 、自分から進んで活動に参加することも少ない。他者と共有する場面では、相手の意見を書き写している様子が見受けられる。

〈表 2 各学習活動と意欲を引き出す工夫〉

期	時	学習内容	主な学習活動	意欲を引き出す工夫
Ⅰ期	1	中部地方の生活の舞台	中部地方の地形と気候の関連性から自然環境の特色を理解しながら、3つの地域の違いを学ぶ。	身近な青森県の風景を入れた写真と地図を使用したクイズや使用し、興味関心を引き出そうとした。
	2	中部地方の人々の営み	中部地方の人口や産業の地域的な違いを、自然環境の違いや交通網の状況などから考察する。	生徒が知っている生産物や身近にある生産物を、スライドで視覚的に提示した。また、調べ学習の際は、7人の生徒を中心に机間支援や声かけを行った。
	3	工業の発展と地域の変化	東海地方の近代工業と北陸地方の伝統産業を取り上げ、産業の発展と交通網の関係性について考える。	資料から読み取りを行わせる際に、7人の生徒を中心に机間支援を行うこと、学習意欲の低い生徒の意見を、発表させることで全体に広げることが意識した。
	4	自然環境を生かした各地の農業	資料を通し、3つの地域の農業の特色について、自然的条件と社会的条件を踏まえて理解する。	生徒が食べたことのあるお菓子上で興味関心を引き出そうとした。学習意欲の低い生徒が発表できるように当てる工夫をした。
	5	世界と結びつく中部地方	名古屋大都市圏と新潟市を中心とした世界との結びつきについて理解し、単元のまとめを行う。	7人の生徒を中心に机間支援を行いながら、良い意見を取り上げて全体に共有できるようにした。
Ⅱ期	1	第一次世界大戦と日本	第一次世界大戦を、これまでの戦争との違いを総力戦や新兵器に着目しながら学ぶ。	戦争を学ぶ意義を強調した。当時と現在を比較した写真や資料を使用し、戦争の悲惨さを伝えた。
Ⅲ期	1	人権の歴史	世界や日本における人権思想が発展した歴史や人権の必要性を学ぶ。	絵や写真で人権が保障されていない時代の人々の様子を学び、主権者意識を持たせながら、人権の必要性を感じさせる工夫をした。また、周囲と意見を共有できる機会を多く設定した。
	2	立憲主義と日本国憲法	日本国憲法では三権分立や三つの基本原理などに基づいて、政治権力から人権を守っていることを学ぶ。	大日本帝国憲法と日本国憲法を対比させ、「自分たちの人権を守っていくために、どのような憲法を作りたいか」という視点で考えられるよう工夫した。また、周囲と意見を共有できる機会を多く設定した。
	3	国民主権と天皇の地位	国民主権について理解を深め、議会議制や憲法改正の手続きについて学ぶ。	主権である国民として、改めて国民主権の必要性を再認識できるようにした。特に、天皇主権であった頃の国民の様子などと比較しながら展開した。また、周囲と意見を共有できる機会を多く設定した。
	4	日本の平和主義	平和主義について、「武力を使わない平和」と「武力による平和」の二つの立場で「日本人の平和を守るためにはどうするか」を、自分の立場を明確にし、意見を述べ合う。	国民として日本人の平和をどのように守っていくか考えさせた。どちらの立場考えるかを明確にさせ、他者と共有させる。さらに、クイズなども設け資料などを使い自分から学びたいと思えるよう工夫した。
Ⅳ期	1	私たちの消費生活	消費者として経済活動へ参加している自覚を持ち、一人ひとりが「選択」について考える。	総務省の家計調査の項目をもとに消費支出を具体化し、10年後の自分を想定させお金の使い道を考えさせた。その際に、写真でアパートの家賃とその間取りを提示することや、お互いの選択の結果を共有させることを行った。
	2	契約と消費生活	契約が身近なものであることを自覚し、実際に商品を選ぶ活動を通して、契約する時に気をつけることを学ぶ。	クイズを行い、自分自身が契約を結んだ経験があることを自覚させた。その上で、価格やデザイン等が異なる10種類のイヤホンを提示し、自分だったらどのイヤホンを買うのか理由も含めて考えさせた。

習をⅢ期,12月に行われた2年次後期フィールド実習をⅣ期とする。Ⅰ期では地理的分野を扱う5時間,Ⅱ期では歴史的分野を扱う1時間,Ⅲ期とⅣ期では公民的分野でⅢ期は4時間,Ⅳ期は2時間行った。各時の学習内容と工夫した点を表2に示す。どの期においても,社会的事象を「自分ごと」として捉えさせる工夫を試みたが,私自身の授業の構成力やスキルが発展途上であるため,実際に行った工夫は各期によって変化した。

まず、社会的事象を「自分ごと」として捉えさせる点では、次のような変化があった。Ⅰ期では、「なぜ中部地方を学ぶのか」などの問いかけや言葉かけが少なく、生徒に社会科を学ぶ意味を意識させることが不十分であった。そこで、Ⅱ期では、一時間の導入とまとめの部分で「なぜ戦争を学ぶのか」を問いかけることで、学ぶ意味に気づかせ、戦争という題材を「自分ごと」として捉えられるように工夫した。数名の生徒の意見を引き出すことはできたが、全体で考えを深めることはできなかった。それを踏まえⅢ期では、単元全体を通して「人権の必要性」や「国民としてどのように考えるか」を強調し、その題材を学ぶことの意味に気づかせるとともに、Ⅲ期 4 時間目では、「日本の平和をどのように守るべきか」、個人の意見を班や全体で述べ合い、考えることができた。Ⅳ期では、導入を工夫し、学習内容をより「自分ごと」として捉えられるようにし、その後の学習活動につなげた。Ⅳ期 1 時間目では、自分たちがどのような商品にお金を使っているのかを導入で確認した後、月 20 万円の所得を持った 10 年後の自分を想定し、実際に限られた所得をどのように使うのか考えさせた。Ⅳ期 2 時間目では、どのような場面で契約を結んでいるのかをクイズなどを通して導入部分で意識させた後、10 種類のイヤホンと比較検討し、自分だったらどの商品を購入するのか、それが「なぜ」なのかを理由を明確にさせながら考えさせた。

デジタルコンテンツの活用も各期で変化した。Ⅰ期では、身近な青森県の風景と中部地方の風景を比較することや生徒が普段食べているお菓子を提示することで、興味関心を引くことができた。しかし、学ぶ意義に関連する資料は少なく、授業全体に深まりがなかった。そこで、Ⅱ期では、生徒が第一次世界大戦について理解を深め、「戦争を学ぶ意義」を考えられるような写真資料を提示した。具体的には、使用された兵器や塹壕、それにより被害を受けた人々の様子がわかる写真資料を活用した。Ⅲ期では、人権が保障されていない時代の世界や日本の様子がわかる資料や、授業内容の理解を深める写真などを活用した。Ⅳ期では、Ⅲ期までの経験を活かしながら、学習活動を行う際に生徒がより具体的に考えるために必要な資料を精選し提示した。例えば、自分たちが住んでいる地域のアパートの写真の家賃と間取りの情報も加えて提示することで、自分だったらいくら出してどの程度の設備が整ったアパートに住みたいか具体的に考えやすくする工夫等を行った。

協同学習についても全ての期で取り入れていたが、その具体的な実践には変化があった。Ⅰ期Ⅱ期共に、学ぶ意味を意識できるようなペア・グループ活動が少なく目的も曖昧であったため、生徒間での共有も上手く図れていなかった。そこで、Ⅲ期では、ペアや周囲の生徒同士での共有場면을複数回設け、発表しやすい雰囲気を形成し、グループ活動や全体共有の場で自分の考えを言えるよう工夫した。Ⅲ期の終わりからⅣ期にかけては、必ず個人の意見をまとめる時間を先に取り、自分の意見とその根拠を準備させてからペア・グループ活動を入れるようにした。それによって学習意欲に課題のある生徒も自分の考えを発表でき、他者の意見に耳を傾け、そこから考え深めていくことができた。

期を追うごとに、「デジタルコンテンツの活用」や「協同学習」は、学習の主題を「自分ごと」として捉えさせるための工夫として位置付けられていった。

3 授業実践の分析

(1) 授業に参加する姿勢の変化

生徒の学習意欲を表す指標として、挙手の有無に着目し、ビデオ映像で挙手の回数を確認した(ただし、物理的制約からビデオ画面から外れる左右後方の約10名の生徒を除く)。7人の挙手の有無と7人を除く生徒の挙手の数について、「クイズの場面」と「学習課題に対する考えを発表する場面」に分けて、表を作成した(表3、表4)。表3をみると、クイズではどの期も比較的多くの生徒が挙手しているが、7人の生徒に着目すると大きな変化があることがわかる。I期では挙手が少なかったが、III期、IV期では、ほぼ全員が挙手していた。また、表4からは、学習課題に対する考えを発表する場面でも、7人の生徒は、他の生徒と同程度の割合で挙手できるようになっていた。

このような変化をもたらした要因を、ビデオ映像、7人の生徒を中心に作成したフィールドノート及び生徒の振り返りシートの記述をもとに、以下で分析する。

〈表3 クイズの場面での挙手〉

期時	対象とした7人							7人を除く生徒	
	N	O	P	Q	R	S	T		
I	1	○	-	×	○	×	○	○	19人中17人
	3	×	-	×	×	○	×	×	19人中15人
III	4	○	○	○	○	-	○		23人中21人
IV	2	○	○	○	○	○	○	○	19人中19人

〈表4 学習課題に対する考えを発表する場面での挙手〉

期時	対象とした7人							7人を除く生徒		
	N	O	P	Q	R	S	T			
I	3	×	-	×	×	×	×	×	19人中	2人
	4	○	-	×	×	×	×	×	20人中	3人
III	1	○	○	×	×	×	○	○	17人中	9人
	2	○	○	×	×	○	○	○	21人中	12人
	3	○	○	×	○	×	○	-	16人中	12人

(2) - 1 I期の授業分析

I期において、授業者は、7人の学習意欲を引き出すには、デジタルコンテンツの活用や机間指導が有効なのではないかと考えた。実際に、身近なものや風景のデジタルコンテンツのクイズでは、7人を含む多くの生徒が興味を示す様子が見られ、机間指導は活動の遅れを防ぎ取り組みを促す上で、一定の効果があった。しかし、7人の学習意欲を高めるには十分ではなかった。

Pさんは、デジタルコンテンツを活用している場面では顔を上げていたが、それ以外の授業者が口頭で説明する場面やワークシートに書き込む場面等では頭が下がり、下を向いている状態が長時間続いていた。RさんとSさんは、班活動を行った際に授業とは関係の無い話で盛り上がっている様子が見受けられ、学習意欲が低い状態であったことが顕著に表れていた。I期3時間目のクイズで挙手した生徒は、7人中わずか1人であった。さらに、個人の意見を全体で発表する場面を多く設定していたが、自信を持って7人の生徒は積極的に発言しようとはしなかった。Sさんは、I期1時間目で行ったクイズの場面で指名されたが、自分の意見に自信が持てず周囲の生徒と相談した後、小さな声でつぶやくように発表していた。

ビデオ映像を確認して、改めてI期の授業を振り返ると、I期は、単元全体を通して生徒に何を学ばせたいのかが不明確であった。このため、生徒に求めた一つひとつの活

動の意義（「なぜ今これを考えるのか」等）が希薄になってしまっていた。また、提示する資料の選択が曖昧で、授業の主題と十分結びついておらず、表面的な興味を引くレベルにとどまっていた。結果として、生徒は、授業の内容を自分につながることで捉えることができず、学習意欲を喚起することができなかつたと考える。この経験をふまえ、改めて、学習意欲の向上のためには、生徒が社会的事象を「自分ごと」として捉え学習に取り組めるようにすること、そのためにデジタルコンテンツについても授業の主題と結び付けて活用することの重要性を認識した。

（２）－２ II期の授業分析

I期での反省から、II期では、導入部分で「戦争を学ぶ意義」を問いかけ、まとめの部分で授業の内容を踏まえた上で「戦争を学ぶ意義」についての考えを積極的に生徒から引き出すようにした。まとめ時の発言や振り返りシートの記述では、7人を含む多くの生徒が自分の考えを持つことができていた。授業後、戦争のゲームが好きなQさんに対して、戦争を学ぶ意義について質問したところ、「戦争はゲームとかだといいいけど、現実だとしちやいけないから」と答えた。

デジタルコンテンツの活用では、塚本（2008）を参考に学ぶ意義と結びつけて授業の本質を考えたいくなるよう、当時使われた兵器や塹壕、人々の様子など、生徒の感情に訴えかけるような資料を精選して提示した。Pさんは、デジタルコンテンツを活用しながら行った説明をしっかりと聞き、ワークシートへの書き込みなども行っていた。回収した振り返りシートの自己評価や記述部分などから、7人を含めクラスのほとんどの生徒が高い意欲と理解度を示し、とくに個人でまとめた文章や振り返りシートには、写真やその説明から「自分だったら」という視点で考えたことの記述が多くみられた。例えば、Nさんは、「未来にも戦争を起さないようにしなければいけないんだと学んだ。」と記述している。Tさんは、「第一次世界大戦は、多くの被害をもたらしたことがわかり、今の時代でも、もう戦争が起こらないようにと願っています。」と授業を通して考えたことを書いている。このように、生徒一人ひとりが「自分ごと」として戦争を考えることはできたが、一方で、個人で感じたことや考えたことを共有する協同学習の場面が少なく、子ども達の思考が個人の中でとどまってしまう、意見を出し合う中で深まる場面が十分でなかったことが、II期の課題として残った。

（２）－３ III期の授業分析

III期においては、生徒が社会的事象を「自分ごと」として捉えられるように、「学ぶ意義」を意識して教材を工夫するとともに、井上（2014）を参考に、ペア活動やグループワークの機会を多く設定した。生徒同士が語り合うことで、さらに「自分ごと」としての意識を深めることができると考えたからである。具体的には、「人権と平和」をテーマに、単元を通して、自分が主権者であることを意識しながら人権や憲法の必要性を考えさせ、考えたことを生徒同士で意見交換する時間を多く設けて、「自分ごと」に落とし込むようにした。

ビデオ記録では、意見を活発に共有し合うことで、自分の意見に自信を持って発言し、お互いの考えを深め合うことができていた生徒の姿が見られた。特に、平和を守る方法

について扱ったⅢ期 4 時間目ではそれぞれの生徒が自分自身の考えをまとめた上で、自分と同じ立場と逆の立場に立つ他者の意見を聞きながら、学習に取り組めるよう授業構成を工夫した。特に、7 人の生徒については、発表前に周囲と意見を共有できる時間を設けた効果は大きかった。Qさんは、普段の授業ではグループ活動や意見発表に消極的であるが、この時間は積極的に相手と意見交換をしている様子が見られた。自分の選んだ立場とその理由を全体の場で発表する場面では、少数派である「武力による平和」の立場で挙手をし、「最初は、武力を使わない平和が良いと思ったけど、だまされて攻められたら意味ないし、最終的には武力による解決しかないかもしれない。」と発表していた。

このような協同学習に加え、Ⅲ期では、Ⅱ期の成果を踏まえて、学ぶ意義に気づかせるような声かけを毎時間意識的に行うとともに、課題を「自分ごと」として捉えやすくするためのデジタルコンテンツおよび配布資料の工夫も引き続き行った。また、授業に少しでも参加しやすくなるよう、クイズについては、選択肢を設けた。Ⅲ期 4 時間目のクイズでは、答えを配付資料から探させたが、これまでの授業の中で行ったクイズに消極的だった Pさんが、このクイズには参加することができていた。

(2) - 4 Ⅳ期の授業分析

Ⅳ期は、これまでの集大成として、Ⅰ期からⅢ期までに行った授業の工夫や反省点などを踏まえて、実践に取り組んだ。授業を構成する前に、学習意欲を向上させる指導について検討し、改めて、核となる部分を「社会的事象を自分ごととして捉えさせること」に設定し、さらに「デジタルコンテンツ」や「協同学習」は、それ自体に意味があるのではなく、「自分ごと」に落とすための手段として重要なものであると位置付けた。

Ⅳ期では、2 時間を通して、生徒が「消費者」としての自覚を持ちながら、「自分だったら」という視点で考えていけるように授業を構成した。Ⅳ期 1 時間目では、1 ヶ月以内に自分自身や自分の家族がお金を払ったものを思い出させた後、総務省の「家計調査」の項目を用いて具体化した。その学習を踏まえた上で、消費者として自分自身で考え、選択していく大切さを実感させるために、「10 年後に月 20 万円の所得で一人暮らしをしている自分」を想像させながら、ワークシートの表にある項目を使いお金を配分させた。その際には、デジタルコンテンツで、実際のアパートの間取りと内装が分かる写真、家賃等を合わせて提示し、口頭での説明を加えた。さらに、協同学習を取り入れ、自分たちが書いたワークシートの表を周りや班で見せ合いながら共有できる機会を設けた。

Tさんは、隣の生徒と住居費について話し合う中で、「どうしてこの金額に設定しているのか」と質問され、その理由を「住むならトイレは洋式がいい、最低でも 3 万円。これより下だと住めないと思う。」と説明していた。さらに、まとめの部分では、活動全体を踏まえた上で「自分で良い生活ができるように全体のお金のバランスを考えて、お金を大事にする。」と自分の言葉で文章を書き、発表することができていた。「自分だったら」と協同学習の中で考えることができていたからであろう。

Ⅳ期 2 時間目では、参加しやすい契約クイズや実際に商品を選ぶ活動を行いながら、生徒の学習意欲を高める工夫を行った。クイズでは、前回効果のあった「選択肢を設けたクイズ」を意識し、○×形式で出題した。ワークシートに自分の回答を記入させ、×

の数を授業者が聞く際に挙手させたが、事前にワークシートへ回答を記入させたことと、理由を問わないことを約束し気軽に挙手できる雰囲気を作ったことで、7人を含む全員が手を挙げることができていた。

また、2時間目では、消費者としての自覚を持たせるため、商品を選ぶ活動を行った。この活動では、生徒の購買意欲が比較的高いと思われるイヤホンを提示することで、「自分だったらどれを買うか」という視点で考えられるようにした。10種類のイヤホンについて、商品の写真や特徴、メーカー等の情報をまとめた資料をデジタルコンテンツと紙媒体で提示した。資料をもとに、個人で一つの商品を選び、選んだ理由を含めて班で共有させた。

この活動において、資料を読み取り考えることが苦手なNさんに変化があった。Nさんは、もともと複数の資料を比較しながら考えることが不得意であるため、読み取りの時間には周りから後れを取り、諦めてしまう姿が度々観察されていた。しかし、この活動では、イヤホンに興味を示し、自分が持つ既存の知識と結びつけながら具体的に考えようとしていた。班活動の場面では、資料にある情報をもとに「ソニーは、技術が高いから安心できるので、もし、俺が買うならソニーです。」と答えることができた。振り返りシートの記述の部分からは、Pさんにも変化があったことが分かった。これまで単語だけを書くことが多かったPさんが、「商品をこうにゆうするときは、よくみて判断する。」と文章で書いている。「こうにゆう」という言葉は、授業者も周りの生徒も使っていない言葉であり、Pさんの思考の中から出てきたものと考えられる。

IV期の2時間の授業を通して「自分だったら」という視点を大切にすることで、自然に学習内容を自分と結びつけながら考え、積極的に授業へ参加している生徒の姿を確認することができた。学習内容を「自分ごと」として捉えさせることで、生徒が自分で考えてみたい、他者の考えを聞きたいと思える授業になったと考える。

4 成果と課題

(1) 授業実践の成果

IからIV期へと改善を重ね、生徒が社会的事象を「自分ごと」として捉えられるように工夫した授業を行うことで、学習に対して消極的な意識を持つ生徒の学習意欲を向上できる可能性を見いだすことができた。I期は、授業者として未熟であり、生徒に社会的事象を「自分ごと」として捉えさせることができなかったが、IV期では7人の生徒全員が授業に参加しようとしていた。様々な学習活動で、その時間の課題に対してそれぞれが考え、自分の意見を持ち、周囲の生徒へ伝える場面が多く見られた。学習内容を自分自身の実生活と結びつけながら考えさせることで、生徒が具体的なお金の使い道や一人暮らしをしている将来の自分等を想像でき、生徒一人ひとりが社会科を学ぶ意義を見いだしたことが、7人の学習意欲向上につながったと考える。

また、生徒に社会的事象を「自分ごと」として捉えさせるにあたって、デジタルコンテンツの活用と協同学習が重要な役割を担うことが分かった。その地域その時代の風景や状態を実感し、感情に訴えかけるようなデジタルコンテンツや、活動の中で生徒の考

えを深めるための資料を精選しながら提示することで、学習意欲の低い生徒でも具体的な場面や情景を思い浮かべやすく、意欲的に取り組みやすくなると考えられる。特に、Nさんのように文字資料が苦手な生徒にとっては、文字以外の資料から「自分ごと」に落とし込んで考えさせたことが、学習意欲の向上につながったと考える。また、Pさんのような、授業内容自体に関心を示すことが少なく寝てしまうような生徒も、具体的な情景が思い浮かぶ資料で授業内容を身近なものと感じさせたことで、最後まで積極的に参加する姿が見られた。協同学習については、普段何気なく一緒に学校生活を送っている生徒と意見を伝え合うことで、より学習内容を「自分ごと」として捉え考えるための重要な役割を担っていたように思う。特に、Tさんのように、自分から進んで活動に参加することが少ない生徒は、ペア学習や班活動の中で、相手から自分の考えについて質問されることによって、自分自身の考えを深めることができたと考えられる。

(2) 今後に向けて

今回の研究を通して、社会的事象を「自分ごと」としてとらえることが生徒の学習意欲を大きく向上させること、そして、「自分ごと」にするために「デジタルコンテンツ」及び「協同学習」を活用した実践を展開できたことは、中学校の社会科教員となっていく自分にとって、大きな成果であった。しかし、授業実践者としては、はじめの一步を踏み出したにすぎない。今後も、生徒の学習意欲を引き出せるように、全ての授業で努力を重ねていきたい。

今回の研究は、実習生という立場で取り組ませていただいた実践研究であったため、生徒の社会経済的背景と学習意欲の関係性を直接扱うのではなく、授業場面で生徒の学習意欲を引き出す研究となった。今後は、現場の一教員となる。そこでは、子ども達の社会経済的背景を理解した上で、教育活動に取り組んでいきたい。現場で目に見える学力だけに注目するのではなく、子ども達の見えづらい背景まで考慮しながら、学習意欲を向上させることができる社会科教育を目指していきたい。

〈参考文献〉

- 湯浅直美他（2009年）『子どもの貧困白書』明石書店，p.15
- 阿部彩（2008）『子どもの貧困ー日本の不公平を考える』岩波新書，pp.4～5
- 荻谷剛彦（2001）『階層化日本と教育危機ー不平等再生産から意欲格差社会（インセンティブ・ディバイド）へ』有信堂高文社，p.182
- 内閣府（2014）「子供の貧困対策大綱」p.4 <http://www8.cao.go.jp/kodomonohinkon/pdf/taikou.pdf>
- 南浦涼介，柴田康弘（2013）「子どもたちの社会科学習観形成のために教師は何ができるかーある中学校教師とその卒業生の事例からの探索的研究ー」全国社会科教育学会『社会科研究』第79号，pp.26～35
- 塚本康一（2008）『確かな学力の向上を図る社会科の授業づくりー社会認識の育成を目指す指導方法，授業評価の研究ー』福井県教育研究所研究紀要113号，pp.77～90
- 井上篤子（2014）『生徒の学習意欲と思考力を高める社会科の授業づくりの研究ー協同学習の実践をとおしてー』島根大学大学院教育学研究科「現職短期1年コース」課題研究成果論集5，pp.1-10